昭和６２年度
（１９８７）

第２７回大会

男子優勝　東海大四　　女子優勝　札幌清田

【　専門委員長　全国大会　寸評　】

今大会は地元開催ということで、強化策も実り、各校・各選手、好成績を残し、満足のいくものであった。

団体戦では、札藻岩は惜しくも１回戦で敗退したが、東海大四のベスト８を始め、札清田・札静修のベスト１６は納得のいくものだった。中でも東海大四のベスト８は、札藻岩、札清田以外の全国大会出場校は達成したことがなく、初出場でこの成績は立派である。

個人戦では、ダブルスで札清田の灰野・森、札静修の下田・新谷、東海大四の伊佐治・藤沢がベスト１６に入るなど、各選手十分に力を発揮した。特に一年生ながら東海大四の山田はシングルスでベスト１６に入り、昭和６０年度の山田（札藻岩）以来の全国高校ランキングに名を連ねることになった。

今大会では１年生の出場者が例年にない多さで、札清田の金沢、札静修の久木など、将来有望な選手である。これら１年生選手の１年後２年後を期待したいものである。

（　専門委員長　　緒方　寿人　）

優勝のよろこび　　男子　　東海大学第四高等学校

全道大会団体戦、個人戦単複の完全制覇。この目標に向かって、この春、創部一年目の東海大四テニス部は、選手５人でスタートを切りました。

自分たちがこの部の伝統を築いていくのだという意識、そして少人数だからこそのチームワークの良さが私たちの武器でした。そして、実戦的な内容の濃い練習の中で、技術的なことだけではなく、精神面においても、私たちは多くのことを学びました。そんな練習が実を結び、私たちは無事に決勝戦に勝ち進むことができたのです。

決勝戦の相手は伝統ある藻岩高校です。試合前のリラックスムードは、コートに入ると一瞬のうちに引き締まったものに変わりました。最初のダブルスは、藻岩高校の伝統に押しつぶされたように実力が発揮できない間に敗れて、私たちはピンチに立たされました。

しかし、シングルスでは自分たちの普段の試合運びができ、２－１で勝利をおさめて全道制覇を成し遂げることができました。

表彰式の時に、優勝旗を受け取った瞬間、改めて「優勝」重みをひしひしと感じました。そして来年もまた、後輩たちにこの感動を味わってもらいたいものだと思います。

（　東海大学第四高校　主将　　伊佐治　正啓　）

優勝のよろこび　　女子　　札幌清田高等学校

私たち清田高校庭球部は、今年も圧倒的な強さで、４年連続、７度目の優勝に輝きました。

２月に緒方先生が入院された１ヶ月は私たちだけでの練習となり、とても不安でしたが、その間に部員それぞれが精神面での素晴らしい成長を遂げました。「今年の清田は危ない」などと言われたこともありましたが、私たちは、絶対に負けたくない一心で、優勝を合言葉に頑張ってきたのです。

雪が解け、外で練習ができるようになってからは、毎日、ボールが見えなくなるまでつらい練習をしました。そして、春季大会や地区大会などでの自分の試合の分析を必ず行い、全道大会に向けて調整してきたのです。

先生はいつでも試合前に「落ち着いて試合をしてきなさい」とおっしゃいますが、本当にその通りだと思います。気持ちが散漫になっているときは実力を出し切ることができないということを、身をもって知りました。

江別市での全国大会では、両親や学校、先生方先輩方、地元のみなさんの盛大な応援のなか、精一杯頑張りましたが、団体戦もダブルスもあと一歩というところでベスト８入りを逃してしまいました。今大会は天候にも恵まれず、雨の中での決勝戦となりましたが、とても白熱した素晴らしい試合内容で、私たちに強烈な印象を与えてくれました。

これからは、また新しい気持ちで練習に励み、良い伝統を守り続けていこうと思います。

（　札幌清田高校　主将　　灰野　喜李子　）

全国高校総体（第７７回全国高等学校庭球選手権大会）　　北海道
８月１日～９日　　北海道立野幌総合運動公園テニスコート

男子	個人戦シングルス	優勝	岡田　岳二（堀越）
女子	個人戦ダブルス	優勝	伊達　公子・高木　紀子（園田学園）
	シングルス	優勝	山崎　史子（浦和学院）
	シングルス	第３位	伊達　公子（園田学園）